

日本学術会議主催学術フォーラム  
「学術のビジョンと大型研究計画～マスタープラン2014～」  
開会挨拶

日本学術会議主催学術フォーラム「学術のビジョンと大型研究計画～マスタープラン2014～」が開催されるに当たって、日本学術会議を代表して、ご参加のお礼と、ご挨拶を申し上げます。

今期も、去る3月12日に、提言「第22期学術の大型研究計画に関するマスタープラン（マスタープラン2014）」として大型研究計画のマスタープランが取りまとめられました。荒川泰彦委員長をはじめとする委員の皆さん、作成に当たって議論に参画していただいた多数の会員・連携会員の皆さんにこの場を借りて改めて御礼を申し上げます。

会長として、学術研究の基盤となる大型研究施設、あるいは大型研究のネットワークを提案し、実現のために尽力することは、日本学術会議の重要な役割のひとつであると考えています。今期も27件の重点大型研究計画を含む207件の提案を行ったことで役割を果たせたのではないかと思います。

もちろん、この提言は、これらの研究計画が実現されるべきであるという主張を含んでいるので、今後、関係省庁等が本マスタープランを取り上げ、種々の研究開発事業に生かしていくことを期待します。また、これらの研究計画を提案した各位においても、マスタープラン作成過程で交わされた議論に示された種々の示唆を踏まえて、今後様々な場面で、実現のための活動を続けることと思います。

その意味で、日本学術会議のマスタープラン作成は、提言の発出をもって完了したとはいえ、マスタープランの本来の目標である重要な研究計画の実現という観点からは、これからが本番であるともいえます。

1949年という、敗戦によって学術研究を含めたあらゆる社会活動基盤が壊滅状態にあった中で発足した日本学術会議は、学術研究の再興を課題として活動を開始しました。1954年には、基礎科学の研究基盤として原子核研究所と反射望遠鏡の設置を政府に申し入れ、

翌 1954 年には長期研究計画調査委員会を設置し、基礎科学研究体制の再建のために、大学講座の充実や共同研究を要望するとともに、分析化学中央機関、物性物理等に係る研究所、共同研究施設の設置提案を行いました。幸いにも、これらは次々と実現され、日本学術会議の要望や勧告を受けて政府が実現するというパターンが形成されていったのです。

そうした延長で、1965 年には、日本学術会議は「科学研究計画 1 次 5 カ年計画」を作成して、より体系的な研究施設や研究基盤の整備を提案しました。しかし、この 5 カ年計画は、結局 1 回作成されただけでした。種々の解釈が可能ですが、何よりも 1956 年に発足していた科学技術庁や 1959 年に発足した科学技術会議が、それまでの日本学術会議の果たしていた研究基盤整備計画立案の役割を果たすようになり、この分野での日本学術会議の役割が低下したことがその背景にあったと思います。

それ以降、2010 年にマスタープラン 2010（提言「学術の大型施設計画・大規模研究計画—企画・推進策の在り方とマスタープラン策定について」）が作成されるまでの間、日本学術会議はこうしたまとまった研究施設、研究計画に係る提案を行わなかったのです。むしろ、日本学術会議の役割をこうした科学研究促進に向けた要求を行う活動から遠ざけて、科学の持つ社会的影響に着目して、社会への責任を果たすことにおくべきであるという主張が強まっていたといえます。

このような歴史があるからこそ、今回のマスタープラン作成に当たって、節度ある提案、利益相反への配慮等を求める意見が出て、それを十分に配慮する形でマスタープランが策定され、活用されようとしているといえます。したがって、ある意味で、実現のされやすさという観点はあまり考慮せず、科学者の視点で現代における必要性が高く認められるか否かという観点から作成されたのです。

今回のマスタープラン作成及びそれに向けて行われた上記の観点からの議論は、日本学術会議の見識を示したものとして評価されると確信しています。戦後期のような予算付けを強く促すような役割を日本学術会議が果たす必要はないかもしれません。しかし、一方で、科学者の観点から我が国が中長期的に推進すべき研究計画の全体像を明らかにすることは重要なことであると考えています。こうした計画を政府や関係者に提示することによって、科学研究の全

体像を踏まえた資源配分を促す効果があると期待しています。

今回のマスタープランでは、大学や学協会をはじめとする関連諸研究組織への呼びかけることによって、これまで以上に、広い裾野からの提案があったことは大きな成果であります。選考過程においても可能な限り透明性が確保されたといえます。日本学術会議として、今後も、マスタープランを積極的に各方面に理解してもらう活動を行い、マスタープランがどのような評価を受けていくのかを注視していきたいと存じます。本シンポジウムでもそうした観点から活発な議論が行われれば幸いです。

2014年5月30日（金）  
日本学術会議会長 大西隆